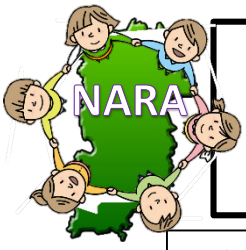

つながり

奈良県立ろう学校　特別支援部
２０２１年　１１月号

難聴学級便りPart2～支援内容や取組の紹介～

今月号は昨年度に引き続き、地域の学校できこえにくいお子さんを担当している先生が実践されている取組等の紹介をさせていただきます。（Part１は、ろう学校HPより、地域の方へ→特別支援部→情報誌の発行→2020年10月号で閲覧可能です）

今回お寄せくださったのは、難聴学級２年目の先生で、おそらく皆様にとって経験年数が近い立場であり、親しみやすいお人柄の方です。難聴のお子さんも保護者も信頼しておられ、楽しく学校生活を送っている様子を目にして、「いいなあ。私もこんな先生に担当してもらえたら･･･。」と思えるエピソードがたくさん。残念ながら個人情報の関係で学校名等をお載せすることは控えさせていただいておりますが、もしご質問や感想等ありましたら繋げさせていただくことも可能です。どうぞよろしくお願いいたします。

ーはじめにー

Aさんは、だじゃれと工作が大好きで、休み時間には一目散に運動場に飛び出していくとても活発な男の子です。彼は両耳感音性難聴児童で１年生の途中から両耳ともに人工内耳となり、２年生の１年間をかけてその調整を続けていました。

静かな環境であれば、問題なく言葉でコミュニケーションを取ることができます。ロジャーを活用することで、交流学級での授業にも楽しく参加することができるため、取り出し学習は行っていません。そんなAさんとの出会いは彼が２年生の時でした。今回はAさんと共に歩んだ１年半の経験の中で学び意識してきたことをお伝えしたいと考えています。

ーAさんとの出会いと歩みー

新学期が始まってお互いに探り探りの時期。

授業が始まり、さてどんな支援をしていこうかと気合を入れ、授業に臨みました。彼の様子を見て、時々声をかけたり合図をしたり、ホワイトボードを使ってみたりと前年度から引き継いだいろいろな支援を行ってみました。（今考えれば静かな授業中でロジャーを使っているのだから聞こえないはずはないのに･･･）

彼にとってありがた迷惑なことを続けていたのでしょう。だんだんと「大丈夫。」ともいってくれなくなくなり、時には手で私を遠ざけようとすることもありました。その後、とにかく彼のことを知ろうと、外で一緒に走り回ったり、好きなものについておしゃべりをしたりしていきました。関係ができてきて、いろいろな形での支援も探り探り行っていましたが、相変わらずうまくいかないことだらけでした。

そんなことを悩み続けた結果、正直に私の気持ちを話してみることにしました。
「先生は、Aさんではないからどんな風に聞こえているのかどんな時に聞こえにくいのかがわからない。困っている時に手伝いをしたいけど、いつ困ってるのかがわからない。困っている時には、声をかけてほしい。」と話しました。驚いたような様子でしたが、「わかった。」と言ってくれたので、その日からはドシッと構えて声かけも最低限にして、基本的には見守ることを続けていきました。

数週間か経って、国語の学習でグループでの話し合いが行われました。周囲の声が飛び交うのでもちろん聞こえにくくなることもわかってはいましたが、そのまま見守りを続けました。しばらくするとこちらに来たので、「どうしたん？」と尋ねると、「聞こえにくいからマイクを使いたい。」と伝えてくれました。「伝えてくれてとても嬉しい。これからも困ったときにはいつでもおいで。」と笑顔で伝えられました。

今思えばこの日から、二人の支援の形作りがスタートしていったと思います。
支援を考える中で大切にしてきたことは以下の３つでした。

①とにかく関わること

私はとにかくAさんのことを知りたいという一心で関わりを続けました。
チャンスがあれば一緒に遊び、朝のロジャーの着脱時のちょっとした時間に好きなものを聞いたり、聞いてもらったり･･･（そこで、お互いドラえもんが好きということが判明）。
そんなことを繰り返して行くことで**お互いの本音を言えるような関係**になっていったのだと思います。
今でも時々、朝の時間に「前の話し合いの時にマイク使わんかったんやけど、ちゃんと意見言えた？」と聞くと「ちょっと周りがうるさかったけど言えたよ。」という**具体的な聞こえの確認を行うための大切な時間**になっています。

関わり続けることで気づくことができたのはそれだけではありません。遊びの中では自然と友だちとの関わりも見ることができます。それを見ていると聞こえづらそうにしていたり、曖昧な返事をしていることもあり、そんな姿から**静かな授業中ではわからない困り感**がわかりました。
また、友だちと一緒に遊ぶ中で私自身が関わりの見本になることもできました。空前の増え鬼ごっこブームが来た時には学年の男子のほとんどが集まりました。様々な音が混在する校庭では誰が鬼かわからない状態があり（そのスリルが楽しさでもありますが）、鬼かどうか聞いても分かりづらい状態になっていました。そのことを本人に確認した後、**私が率先して鬼の時には指を２本頭の上に立てて追いかけることで、真似する児童が増えていき、遊びの中で支援の形を広げることができました。**

②支援はできる限り、本人からスタートすること

これは出会いのはじめに失敗した経験から学んだことです。
あの時は私は、やる気の空回りで気づくことができませんでしたが、**聞こえているのに聞こえているかどうかを聞かれたら誰だって嫌**ですよね。だからこそ**困ったときには呼んでほしいとドシッと構えることがとても大切**だと思いました。

本当に困った時に伝えてくれた時には「伝えてくれると嬉しい。自分で必要かどうか考えられているのがすごい。」と具体的に褒めることを続けていきました。**こちらから与える支援ではなく、Aさんが支援が必要かどうか考えた上で求めた支援を続けられるようにしていく**ことは、お互い気持ちの良い日々を送るだけでなく**長い将来を生きていくための大切な力**になっていくことだと思います。

③支援の形は必ず相談して決めること

だんだんと支援を求められるようになってきた後、私は支援の形を変えていきました。
今まではこちらからパスアラウンドマイクやタッチスクリーンマイクを渡すようにしていましたが、もっとよりよい方法を考えられるようになれたらいいなと考え、まずは普段の授業で支援を求められた後すぐに道具を渡すのではなく**「どうする？」と相談するようにしてみました。**
最初はびっくりしていたものの、続けていくことで**今までの経験を生かしてその場面にあった道具を選べるようになっていきました。**
一番の成長を感じたのは運動会の時でした。
外のスピーカーの音に合わせてダンスをしなければいけなかったので、そのスピーカーの音をきちんと届けられるようにスピーカーの付近にマイクをおいてダンスの練習をしていました。それが聞こえにくかったようで、その後**「少し上のほうに置いてみるといいかもしれない」と伝えてくれ、二人で何度も調整を行って決めることができました。**

音楽の合奏の際には、鉄琴担当でした。合奏中はたくさんの音に囲まれることになるので、どこにマイクを置けば自分の音が聞こえやすいかを一緒に考えて、音がでるパイプの下に置くと聞こえやすいということを二人で考えました。相談しながら決めていくことで、より聞こえやすく、Aさんが聞こえやすい環境を作る方法考える機会を作っていくことができました。

ーそしてー

「失礼しまーす！」と職員室にやってきます。そして、登校後すぐに職員室でロジャーの準備をします。手慣れた手付きで人工内耳に小さなパーツを装着し、タッチスクリーンマイクを自分で接続して、交流学級担任まで運んでいきます。装着の間は、私との雑談タイム。天気の話やお気に入りのおもちゃの話をして、一盛り上がりしてから教室に向かっていきます。

教室に入って、朝の準備を終えると外遊びに向かい友だちとの時間を過ごします。

授業が始まると、自然に話している人の方を見て、集中し始めます。話し合い活動が始まり、周りの声が騒がしくなり聞こえにくいと感じると、「マイクを貸してください。」と近くの先生にきちんと伝えにいきます。音楽の授業や、英語の活動など聞こえにくい時には、必ず自分でそのことを伝えたり、自分でパスアラウンドマイクを使い始めます。

外に遊びにいくと、大はしゃぎで遊び、汗だくになって帰ってきます。鬼ごっこをしていると、誰が鬼だかわからなるのですが、きちんと友だちに聞いて確認しています。中には、両手の指を２本頭にたてて、鬼のジェスチャーをしてくれている子もいます。そんな日々を楽しそうに過ごしています。

ー最後にー

１年半Aさんと過ごして来て、私にとって学ぶことがたくさんありました。

いろいろなことを書き連ねながらそのことを振り返ってみると、難聴児と関わることに対して特別なことだと思いすぎていたんだなと感じました。聞こえの支援は確かにありますが、それは他の子どもたちが必要としている支援と大きく変わりません。

その子のことを知り、その子が支援を求められる（助けを求められる）、そして自分でどうすればよいかを考えることができるように寄り添うことが子どもたちにとって改めて必要だと感じることができました。これからも、自己の研修を積み、子どもたちと毎日楽しく充実した日々を過ごせるように努力したいと思います。今回の私の経験が、みなさんにとって少しでもお役に経てば幸いです。

読んでいただき、ありがとうございました。

N先生と関わるAさんの様子を１年半見させていただき、学校で聞こえにくさを周囲に伝えたり、必要な配慮を考えながら工夫したりできるようになっていることに大きい成長を感じ、とても嬉しく思っておりました。決して必要以上に支援を先回りせず、適度な距離を持ちながらあたたかく見守りながら、Aさん自ら動いていくように取り組まれたことが本人の生きる力（自立）につながっていると感じています。

似たような聞こえ方でも、子ども一人ひとりの実態は違いますので一概に同じ支援は当てはまらないところがあるかも知れません。今はまだ少し寄り添いながら、こちらから支援方法を提示し選択させる方法いいケース、今回のように子どもからの発信を辛抱強く「待つ」のが効果的だったケースなど様々に感じています。これからも学校・保護者・本人と連携しながら、きこえにくい子どもたちが充実した学校生活を送れるように支援を頑張りたいと思います。

（文責　椿野）

「きこえにくい子に合った支援方法を知りたい」「子どものきこえの状況を把握したい」「子どもは、どんな時に困難さを感じている？」など、お聞きになりたいことや相談したいことがありましたら、いつでもご連絡ください。一緒に子どもたちへの支援を考えていきましょう。

奈良県立ろう学校　特別支援部　TEL　0743-56-2921　FAX　0743-56-8833